

昭和七年六月十五日 一月六日 五日十日十五日廿日廿五日廿日 第三種郵便物認可

# 常磐新聞

社期新券常前資 九五町南町平縣島福 次除藤伊人行發 一港古町濱名小縣島福

はリスク 堂生資 町濱名小 番四四一話電

## 海水浴期節を控へて 町民の關心事

海水浴シーズンを控へて濱海水浴客の積極的誘引策として天恵的な地の利を無分から珍客を迎へた關心に終るとは自他共に全町民が心の一部を天恵に反する行為と言ひ得るべきであらう。...

## 近事(片々)

四倉町長新妻盛氏は約一ヶ月の豫定にて滿洲國視察の爲め去る七日出發した。...

## 小名濱漁業組合 組合長決定

豫て漁業組合に於ては理事監事決定し組合長互選に先立ち立花理事の辭任申出等が...

久保田醫院 警察として専念

新生面を見せつゝある 水野技藝女學校

指趨に順應し 小名濱町女子教育の

はリスク 堂生資

(一) 號五十九百第 (可認物便郵種三第)

毎年のことながら宣傳誘引策が小名濱は消極的だ、來る奴は黙て居ても來る主義は買へに來たか賣てやる、と共に餘りに心理を解せずの行爲と言わねばならぬ、不景氣の解消も一家經濟の與隆も思考が先決だ

た爲め其責を負ふての措置情が集つて居る、組合の父として太氏の白目を希ふ多敷の聲であるようだ。

江名漁業組合の騎士永野主事が辭めた漁業組合の事務員も運使辭めたとの噂が何なる内情かは調査の上でなければ言ひないが、江名新與滿洲帝國の視察は何物かを掴み得るであらう大四ツ倉建設の上にも神益するであらうし又新妻盛氏の庶位見聞する點に於て氏を啓發する事も甚大と云ふべきである。

江名信用組合もスツカリ叩いて見たら矢張り塵埃が吹いて見ると今直の手で取調中から餘計な事は言はないが江名組合の生みの母である江名町は各方面に受難の時らしい。

久保田醫院 警察として専念

新生面を見せつゝある 水野技藝女學校

指趨に順應し 小名濱町女子教育の

はリスク 堂生資

要諦は彼の異色、筆を許さざるものを痛罵暴露せしめずては敢て政黨の弊に提げに提げることなく、和して全世に流に公平なる見地に在ることを期す。

今昔と内と外

現代人と筆の立場

有り難き文筆より女郎の起筆文は萬雨の借用證は辭令から又は感状に至るまで料亭の付にいたるまで筆の毛先に取扱われ筆は毛筆に限るもの萬代不易と考へ居る、東洋文明も白駒の筆の生命は超現代的にある

尾城寫眞館

中島通り

其間に勢力を占め筆先は能率の先驅を承り事務的の用具となりぬ、然し一代の文豪として徳富翁の名文も西洋カブレの鐵ペン否金ペンで物されても其詩文に批評に東洋氣分横溢し居る處は聊か差支なからんか吾々想像して先生の氣品文章に反映して高雅明哲なる余韻に恍惚たらしむ現代文章家の多くペン先にて物たる草稿に物足りなく感ずるの余り如何にもレターペーパー薄べらな感じがする然し女郎の起筆文の方が東洋否日本的な懐かしみがある金何圓の借用證筆勢いかめ

銘酒は清世界

青葉の下晚春を味ふは小瀧源泉 たきの湯 小名濱郊外大原

開陽堂店主 松崎勳

樋口吳服店 小名濱町中島通り

磐城水産工業株式會社 小名濱町中島通り

長品廉賣に勝る商略なし 磐城セメント 代理店

金物問屋 釜屋商店 東京振替貯金口座一〇九九番

品質本位 三ツ馬印特製 タヌキ印特製 ゴム靴 小島履物店

享樂地 小瀧源泉 たきの湯 小名濱郊外大原

お知らせ!! 今度當校内に左の部を新設致しました何時でも入學出來ます

洋裁部 (六ヶ月卒業) 刺繍部 手藝部

水野技藝女學校 親切・勉強・正確・安心の薬舗

白石薬舗 寒暖計比重計一般温度計販賣

玉の井 義彰 長瀬 城林村川玉

長瀬芳郎 印刷所 見習徒弟入用 十七才より

馬目タクシー 中村瀧次

門專科眼 院醫科眼木鈴 町田植院本 港古町濱名小 院分 診來後午日毎

久保田醫院 小名濱町電話二二番 木田齒科醫院 小名濱町電話一〇五

池部齒科醫院 江名町 中村醫院 小名濱町電話一八番 上田外科醫院 電話二九

宮津醫院 小名濱 電話一四二番 佐瀨醫院 小名濱電話一三五